

二月のテーマ  
本（も）を忘れず父子の葛藤を  
越えて

え・古屋智子

ある企業の社長が、間もなく還暦を迎える頃、息子のM氏を後継者とすることを決断しました。M氏は父から、「一年間、うちの仕入先で修業をしてこい。話をつけてある」と指示されました。

一年後、予定通りM氏は、父の経営する会社に戻りました。その後、十年の間にさまざまな役職に就きましたが、重職に就くほど、父と衝突するようになりました。父に意見され、叱責されるほど反発は強まり、やがてプライベートでも会話することがなくなりました。

M氏が社長に就任した後も、父親との衝突は続きました。困ったのは社員たちです。「会長と社長、どちらの話聞けばいいのですか」と問われたM氏は、こう答えました。

「もちろん俺の言うことを聞けばいい。あつちは先が長くないから」その言葉には、先代を尊敬するどころか、父への感謝のかけらもありませんでした。

ある時、M氏は毎週通っていたモーニングセミナーで、「ほんとうに、父を敬し、母を愛する、純情の子で

なければ、世に残るような大業をなし遂げる事はできない」という『万人幸福の葉』の一節を読みました。この言葉は、M氏の心に波紋のように広がりました。

また講師から、親に考養を尽くすこと、ご先祖のお墓参りをする事の大切さを聞くうちに、父への気持ちに変化が表われてきたのです。

心中よみがえってきたのは、かつて聞いた父の身の上話です。それは起業したばかりの頃の話でした。

「赤ん坊だったお前を車に乗せて、配達や集金に行ったものだ。配達を終わって車に戻ると、集金したお金が盗まれていたことがあった。でも、お前は無事だった。あの時はどんなにホッとしたことか」

「私は、今までお前のためにやってきたんだ。お前の顔を見て、勇気づけられ、歯を食いしばってやってきたんだよ。お母さんと一緒に……」

その話を聞いた時は、父に何の言葉もかけられませんでした。しかし、こうして振り返ってみれば、父がどんな思いで自分を育ててくれたのか、後継者としてどれほど期待をかけて

くれていたのかがわかります。

M氏は「親に考養を尽くし、恩返しできるような息子になろう。会社を発展させ、社内を活性化させよう」と決心したのでした。

その後、父は他界しました。M氏の会社は何度か大きな危機に見舞われましたが、そのたびに「父ならどうしただろう」と考え、乗り切ってきました。今は、亡き父の教えを受け継いで、次の後継者にバトンを渡すまで日々成長していこうと決意しています。

男にとって父親は、ライバルのような存在でもあります。M氏のように、会社を後継したとなれば尚更でしょう。「父を越えたい」という思いは、成長への活力にもなります。

しかし、恩の自覚なしには、本当の力は湧いてこないでしょう。この世に生を受けてから、数えきれないほどの恩恵の中で生きている私たちは、その恩に対し「ありがたい」と思える人間になりたいものです。

そして、その最たるものは、自分の命をこのように育んでくれた、親への感謝でしょう。